氏　名（本籍）	田　邊　智　子（　東京都　）
学 位 の 種 類	博　士（　図書館情報学　）
学 位 記 番 号	博 甲 第　9650　号
学位授与年月日	令和　2　年　7　月　31　日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審 査 研 究 科	図書館情報メディア研究科
学位論文題目	図書館評価の有効性–評価影響の理論を用いた実証研究–

主　査	筑波大学	教授	博士（政治学）	溝上智恵子
副　査	筑波大学	教授	博士（工学）	歳森　敦
副　査	筑波大学	教授	博士（創造都市）	呑海　沙織
副　査	筑波大学	教授	文学修士	逸村　裕
副　査	慶應義塾大学	教授	博士（図書館・情報学）	岸田和明

論　文　の　要　旨（2,000 字程度）

本論文は、図書館評価の有効性を総体的に明らかにし、有効性を向上させる方策を提示することを目的に、日本の公共図書館が実施している自己評価を対象に、以下の４つの課題を設定し論じている。まずは図書館評価の有効性とその発現プロセスを定性的に明らかにすること（課題１）と有効性の発現状況を定量的に明らかにすること（課題２）である。次に図書館評価の有効性を向上させるために、図書館評価の有効性発現に影響する要因を明らかにし（課題３）、有効性向上に活用できるツールを作成する（課題４）という４課題である。これらの課題を検討するにあたり、文献研究、インタビュー調査、アンケート調査及びアクションリサーチの手法を用いて、分析・考究している。

本論文は全８章から構成され、第１章では、研究目的と課題、研究方法を述べ、先行研究のレビューを行い、分析対象である日本の公共図書館における評価の実施状況を整理している。第２章では、本論文が行政評価で構築されてきた評価理論を図書館評価に適用して分析を行うことから、行政評価と図書館評価の方法論を比較し、共通点と相違点を考察している。

次に課題１を明らかにするため、第３章では、メタ・モデリングの手法を応用し、本論文全体を通じた分析枠組みとなる「図書館評価モデル」（以下「概念モデル」）を作成している。本論文の概念モデルのベースとして評価影響のモデルを選択し、評価の有効性には、公共図書館の組織内部で生じる変化である「アウトカム」と、図書館の外部に波及する好ましい影響である「インパクト」があると整理している。概念モデルでは、アウトカムには「認知・感情的アウトカム」「モチベーション的アウトカム」「行動的アウトカム」の３種類があり、職員と組織の２層のレベルにおいて発現すると想定している。図書館評価の先行研究では、インパクトには「サービス向上」と「アカウンタビリティ向上」があるとされているが、これらは直接観察するのが難しいため、「満足度向上」「利用実績向上」「図書館に対する理解向上」といった代理変数を合わせて観察する手法が選択されている。

続く第４章では、９つの公共図書館を対象に事例研究を行い、概念モデルの妥当性を検証し、図書館評価で発現しうる具体的なアウトカムを検討している。半構造化インタビューによる質的分析の結果、職員レベルでは、認知・感情的アウトカムとして「課題の認識」「業務への理解向上」「全館的視点」「経営的視点」「自館の客観視」、モチベーション的アウトカムとして「改善意識」「目標意識」「対外説明意識」、行動的アウトカムとして「目標達成努力」を導出している。組織レベルでは、認

知・感情的アウトカムとして「課題の共有」、モチベーション的アウトカムとして「改善志向」「目標志向」、行動的アウトカムとして「事業見直し」「業務分析」「計画的運営」「活動活性化」「目標達成指示」「対外説明への利用」「予算要求への利用」を導出している。さらに、アウトカムの関係性を分析し、「改善ルート」「目標達成ルート」「対外説明ルート」の３種類の有効性発現経路を指摘している。

課題２を明らかにするため、第５章では日本の公共図書館（1,367 館）を対象にアンケート調査を実施している（回答館 947、回収率 69.3%）。その結果、いずれのアウトカムについても、評価実施館が非実施館より発現度合いが高く、評価実施の結果として想定したアウトカムが発現していることを示した。インパクトについても、評価実施館と非実施館の状況を比較した結果、すべての変数について、評価実施館のほうが有意に高く発現していたことを指摘している。

さらに図書館評価の有効性発現に影響する要因を明らかにする（課題３）ため、第６章では、第５章のアンケート調査データを用いて回帰分析を行い、影響要因は有効性の発現ルートごとに異なっていたことを指摘している。有意な結果が得られたものは、改善ルートでは「指標の設定」「外部評価」「利用者アンケート」「改善策検討プロセス」、目標達成ルートでは「責任明確化」「適切な目標設定」、対外説明ルートでは「指標の設定」「外部評価」「ベンチマーク」「改善策検討プロセス」「評価結果の公表（ウェブサイト）」であったと述べている。

第７章では、メタ評価のツールの１つであるチェックリストを作成している。まずチェックリスト案を作成し公共図書館２館を対象に試行した。そこで得られた指摘を反映させたチェックリスト最終版を完成させている（課題４）。

最後の第８章では、本論文の総括を行うとともに、指定管理者制度のもとでの評価に関するより詳細な分析や図書館評価未実施館の実態分析等が今後の研究課題としてあげられている。

審　査　の　要　旨（2,000 字以上）

【批評】

公共図書館における評価（図書館評価）の歴史は古く、公共部門の中でも独自の発展を遂げてきた経緯がある。さらに日本では、近年の行政評価の導入もあり、公共図書館では評価が広く普及し定着している。しかしながら、この図書館評価が必ずしも有効に機能していないことも先行研究により指摘されてきた。もっとも先行研究では評価の有効性について必ずしも明確には定義されていないうえ、利用実積等の限られた変数で有効性を捉えようとしており、図書館評価が持ちうる効果の全体像を捕捉できていない可能性がある。ついては、本学位論文では、行政評価の分野で発展してきた評価影響の理論を用いて、図書館評価の有効性を総体的に明らかにすることを試みている。

全体として、本論文は、研究目的が明確に設定され、構造化された研究課題を検討しており、著者の主張したい点は、破綻することなく、論理的に記述されている。さらに、文献レビュー、質的調査及び量的調査という研究手法を用いて、研究手順も確実に実施されており、説得力のある結論を得ている点は極めて高く評価できる。

本学位論文は、全８章から構成されており、以下、本学位論文の構成に従って批評を述べる。まず第１章では研究背景、研究目的や研究方法が述べられており、現状の日本の公共図書館評価においては業績測定が中心となっていることから、業績測定に着目した図書館評価の有効性を明らかにするという著者の問題意識は「現場」に即した課題設定であり適切であると言える。

第２章では行政評価の分野で発展してきた評価影響の理論を用いる背景として、行政評価と図書館評価を比較している。丁寧な文献レビューを行なっており、海外と日本の公共図書館評価の違いも明らかにしている点は妥当である。第３章は、メタ・モデリングの手法を応用し、評価影響の理論を採用した「図書館評価モデル」を作成している。このモデルは、公共図書館の自己評価を対象にしたモデルで、分析レベルを職員と組織の２つに区分し、インプット、活動、アウトプット、アウトカム、

インパクトに整理している。図書館評価が組織内部に「様々な好ましい変化（アウトカム）」をもたらしていたことや、そのアウトカムが相互に影響し合いながら、３種類の発現経路を形成していたことを明らかにした点は、本論文の特筆すべき点であろう。このように精緻に分析されているがゆえに、冒頭で述べたように、行政評価が導入される以前から図書館評価が実施されてきた歴史を踏まえると、分析対象を公共図書館の自己評価、すなわち業績測定に限定することなく、プログラム評価も含めた図書館評価の有効性を論じるモデルの開発も今後期待したい点である。

第４章では事例研究として９館を対象にした質的調査を実施し、第３章で作成した図書館評価モデルの改善を行ったことを詳細に記述している。この改善したモデルをベースにして、第５章では国内の中央図書館的機能を持つ図書館を対象とした悉皆調査をアンケート調査により実施し、図書館評価の有効性の発現に影響する要因を定量的に分析している。その結果、指標の設定、利用者アンケート、外部評価の実施等の取り組みが評価の有効性を高めることを明らかにした点は高く評価できる。第４章で用いた質的調査データの分析と第５章で実施した量的データの分析は、いずれも博士論文として問題なく分析・考察が実施されていると評価できる。

さらに、第５章で得られた調査データを用いた回帰分析を行うことで、第６章では図書館評価の有効性発現に影響する要因を考察している。本論文において著者が指摘するように、図書館評価の有効性発現に影響する要因については、データ数の問題から分析方法に制約が見られた。今後、異なるデータや方法で著者がさらなる検証を行うことを期待したい。

このような手順を経て、図書館評価の有効性を明らかにしたうえで、本論文ではさらなる有効性向上を目指して、公共図書館が自己評価を行う際のチェックリストを作成している（第７章）。チェックリストの使用により、評価の有効性をあげるためには、まずチェックリストで改善可能な点を把握し、次に評価実施方法を見直すことが必要だと本論文は述べている。ただし、本論文で作成したチェックリストやチェックリストという手法自体の有用性を測るには、より長い期間が必要となる。この点も今後の研究に期待したい点である。第８章において本論文の総括が行われている。このまとめも極めて妥当と判断できる。

評価影響の理論枠組みを用いることにより、先行研究にはない視点から図書館評価の有効性を明らかにする本論文は、有効性を可能な限り幅広く捉える方針とすることで、組織外部に波及するインパクトであるサービス向上やアカウンタビリティ向上、その代理指標となる満足度向上や利用実績の向上、さらには中間的な成果物として組織内部に生じる認知面・モチベーション面・行動面のアウトカムを、具体的かつ詳細に明らかにし、評価の多様な有効性を示すことができたと評価できる。これらの成果は、公共図書館の評価改善に貢献するのみならず、評価影響の理論的発展にも寄与できる水準にあると評価できる。

【最終試験結果】

2020 年 6 月 12 日、図書館情報メディア研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。引き続き、「図書館情報メディア研究科博士後期課程（課程博士）の学位論文審査に関する内規」第 23 項第 3 号に基づく最終試験を行い、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

【結論】

よって、本学位論文の著者は博士（図書館情報学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認められる。